

# 太平記卷三十二と源威集

——作者の視点をめぐって——

増 田 欣

—

新田義貞が金ヶ崎城で討死（一三三七・建武四年）し、後醍醐天皇が吉野に崩御（三九・暦応二年）したのち、京都もやや小康を保ってはいたが、畿内周辺における南北両軍の小ぜりあいはたえずく

り返されていた。ついで脇屋義助の病死（四二・康永元年）や楠木正行の敗死（四八・貞和四年）とともにその勢力がいよいよ衰退した南朝は、こんどは足利直義と高師直との反目、尊氏兄弟の不和など足利政権の内部分裂に便乗して、その分派勢力と手をむすび、北朝との抗争を続けていった。文和年中（五二―五）にも、南朝に

合体した反足利勢力である足利直冬・山名時氏・桃井直常らの「宮方」と尊氏・義詮の「武家方」とが、京畿を舞台にはげしく戦い、京都の争奪を再三くりかえした果ては、「京白河ノ武士ノ屋形ノ外ハ、在家ノ一字モツマカズ、離々タル原上之草、累々タル白骨露ニ纏レテ、有シ都ノ跡(ト脱カ)モ見ヘ」ぬ落中のありさまとなった。太平記卷三十二はこのたびの激戦を描いている。

が、卷三十二の立てかたは諸本に異同があり、大きく四類に分かれる。いま西源院本によってこの巻の綱目を示すと(原文は一書き)

- (1)芝宮(後光厳院)御位事  
(2)無袖聖宝劔御即位事  
(3)山名右衛門佐為敵事  
(4)武藏将監自情事

- (5)聖田合戦事并佐々木近江守秀綱討死事(6)山名京落事  
(7)直冬与吉野殿合体事  
(8)獅子困事  
(9)許由巢父事 同虞舜孝行事  
(10)直冬上洛事

- (11)鬼丸鬼切事  
(12)神南合戦事  
(13)東寺合戦事(京軍号之)  
(14)入幡御託宣事

のごとくであるが、流布本やそれに近い系統の諸本(梵舜本・神宮文庫本・野坂本等)では卷三十二は(1)までで、最後の二段(13)(14)は次の巻に含まれ、天正本系統(義輝本・野尻本目錄等)は(9)までとそれ以下とが卷三十一・二両巻に折半されており、普通の四十巻本より巻数の多い諸本(京大本・前田家本・野尻本等)ではこれがそのまま卷三十三に当たっている。事書の表現に小異はあるが西源院本と同じ立てかたは、神田本(国書刊行会本)・永和書写本・織田長意本・相承院本・尊経閣一本・松井旧藏本・篠田本・内閣文庫本・今川家本等々、旧形諸本のすべてがそうになっている。小論にいう「卷

三十二」も旧形本のそれである。

この文和の内乱を描きとめているものとして、太平記のほかに源威集がある。この二つの作品を比較して、両者の相異点、とくにそれぞれ作者の視点のちがいを考察し、太平記の性格の一端にふれてみたい、というのが小論のねらいである。

## 二

源威集は、佐竹家藏本(未見)が知られている唯一の伝本で、史料編纂所にはその影写本があるが、まだまったく流布していない。上下二巻からなり、上巻は「問、入幡大菩薩御当家祖神濫觴如何」「問、昔ヨリ誰家カ王家ノ相門ヲ不レ出、雖レ然御当局限テ代々權柄ヲ執、朝家ヲ守護シ朝敵等ヲ平ケ今モ諸侍ニ首頂ト仰カレ給故如何」(内容は前九年の役の事)「問、後三年ノ合戦ノ支如何」の三段およびいくつかの附話をおさめ、下巻は「問、文治五年<sup>西</sup>奥實謂如何」「問、右大将頼朝卿御京上何ケ度ニ候哉」「問云、後京上ノ支如何」「問云文和式年<sup>西</sup>御京上事如何」「問云、東寺合戦濫觴何事ニ候ケル哉」の四段をおさめて、それぞれ問答体にして記している。序文によれば、建武以来尊氏に随従した者が嘉慶年間(一三八七—八)に記述したものらしい。いま比較の対象としてとり上げるのは、下巻の後半にある文和の東寺合戦の記事である。

終りの部分に、宮方の軍がたてこもっていた東寺をひきあげて京都の戦火もようやくおさまり、洛中の貴賤が天下泰平を喜悅したことを述べて、「歌武将威風、洛中ノ凶徒塵ヲ払ヒ平ク。是モ源氏ノ威勢也」(圍点筆者、以下同様)とつけ加えているが、源氏の威勢を

書きしるすところ、書名の由来もあり、制作の意図もある。その意図をはたすために、頼義・義家・頼朝など源家代々の將軍の英雄的治績を語るという方法がとられたが、尊氏の臣下であるこの作者は、特に下巻の後半において、源氏の棟梁たる將軍尊氏を智仁勇兼備の理想的武人像に形象することに意を砕いている。例をあげよう。

文和四年三月の東寺合戦で、南北兩軍が七条大路に激突したとき、もつとも活躍していた細川清氏が負傷し、その軍が敗走したとの情報が高比叡の尊氏の本陣に達するや、尊氏は二十騎ばかりを率いて急遽七条東洞院の清氏の陣に駆け付けるが、將軍を迎えた相州清氏の陣中を源威集は次のように描いている。

相州並同名ノ輩、土岐佐々木各懸御目、七条合戦端座最中、入御如何ト被レ申ケレハ、例之肩ヲ合セ給テ、合戦に打負ハ面々一妃ニ可レ殞レ命ヲ、此陣破テ後入御無益可レ成テ、御盃ヲ扣テ、敵近付ハ各防戦テ、御自害之時分計可被申テ押静テ御座ス事ノ咎、仮敵鬼御驚奉共御動転ノ無御気色一見エ給ヒシ。武將御威勢不思議ニソ覚エシ。凡ソ軍ノ勝負ハ雖レ為天運、將軍相州ノ陣エ入セ給テ後静タリ。

ここに描かれた尊氏の像は、夢窓国師が尊氏の人徳を賞讃して「第一に心強にして合戦の間身命を捨給ふべきに臨む御事度々に及といへども、咲を合せて怖長の色なし」と述べたという梅松論の記述をそのまま具象化して、加うるに超人的な「不思議」の威力を賦与している。

源威集が尊氏像を描きあげるために用いたいくつかの逸話のなかの一つに、文和三年十二月先妣十三回忌供養がある。時に桃井直常

は北陸道をうち從えて京都にせまり、足利直冬も山陰道を攻めのはり、さらに山名時氏と一手になって丹波に攻め入っていた。風雲急を告げるなかで尊氏は、「於御仏事」ハ、寺家等持院ニ被レ仰置テ、江州エ可レ有御出シ」という周囲の進言をもしりぞけて、「更ニ無御動転」く、

此儀魔ノ障尋也。天道ハ正理ニ可レ組。其故ハ此御仏事ハ依レ無私、大願一切経書写既ニ成就ス。悦ノ上ノ喜也。以テ此供養ノ仏事可成ス処、今責登敵ト云ハ皆以御重恩ヲ立身園ヲ賜テ多勢ヲ從者也。冥變明カナラバ、不義逆從天罰ヲ蒙ルベシ。縦敵入洛スモ御仏事ヲ被レ遂ベシ。

といて、余念なく仏事を営み、とどこおりなく済ませたその翌る二十四日に主上を奉じて京を落ちるのであるが、この話などは、もし軍記物語の作者が、時代の交革を強力に推進していく英雄としての期待を尊氏にかけていたならば、おそらくは見のがすはずもない恰好の素材であったと思われるのだが、太平記はまったくり上げないで、ただ「直冬已ニ大江ノ山ヲ越ト聞ヘシカバ、正月十二日之暮程ニ將軍主上ヲ取奉テ近江國ハ落給フ」と記しただけである。源威集には尊氏が書写せしめたこの一切経を園城寺の衆徒百余人が強請した経緯がしるされているが、今も当寺に伝わっていて、その発願文に「後醍醐院證真常。考妣ニ親成正覺。元弘以後戦亡魂。一切怨親悉超度」などあるように、ただに亡母の供養だけでなく、後醍醐天皇および元弘以来の戦没者の冥福を祈るためのものでもあったが、太平記作者の関心をひくものではなかった。④その他、尊氏が後光厳院に対して臣下の礼節あつく「是ヲ將軍正シキ礼儀」と世間で沙汰した話や、雪の湖水を眺めて古歌を感ずる風韻の士としての一

面を伝える話<sup>⑥</sup>は、源威集作者の立場と制作の意図を如実に示しているとともに、これらのごとくを制鑿した太平記作者の視点の据え場所を否定的に暗示するものである。

### 三

源威集作者の立場は、吉沢博士もいわれるごとく「梅松論と立場を同じくする」(望町文学史)ものである。そこに描かれた尊氏の像や行動が、梅松論にひく夢窓国師の尊氏評の具象ともみられることはすでに述べたとおりであるが、いま一つの例について見よう。

文和四年正月二十日、京都の山名時氏を攻略するために尊氏は近江の武佐寺を発し、勢田に陣して、佐々木道誉に浮橋をつくらせる。翌二十一日、全軍が渡り終えた夜、橋の警固を進言する者があつたが、尊氏は背水の陣の故智にならうって夜半に橋を撤去させる。人々は「將軍、兼(賢)慮ノ武略ニ長給フ」と感嘆したという話である。作者はこの話に續けて「橋ニ付テ昔物語ヲ可レ申」と一挿話を載せているが、それは建武二年(二三三)五月、尊氏の軍と伊豆に戦つて敗れた新田義貞が「遠州天竜河ニ数日逗留メ、浮橋ヲ渡シテ、軍勢不レ残渡テ飯末川ヲ越テ、此橋見苦布臣不レ可レ切、能メ為<sup>三</sup>警固ニ東国ノ勢ヲ渡セト、渡守ニ仰合テ帰洛したという話である。この話は梅松論にくわしいが、源威集の簡略な記述の中にも彼との類似がみとめられるうえに、源威集は橋を警固させた義貞の真意をまったく語らないで、詳しい叙述を梅松論に譲っている。太平記(巻十四、官軍引退箱根事)では、このとき義貞は「浮橋ヲ切テ突流」

し、「敵縦と寄ス共、左右ナク巨スベキ様モ無<sup>⑦</sup>いようにして、足利軍の追撃をまぬがれたことになっているが、かかるくい違いは、源威集がこの話柄を梅松論に汲んでいることを推測させる。のみならず、浮橋を警固させた義貞の話と撤回させた尊氏の話とは、まったく逆な説話でありながら、そのテーマとプロットとは全然同じであることに注意せねばならぬ。すなわち、

1 浮橋を造らせ、全軍を渡して、大将が最後に渡る。

2 味方の有利を図って、橋を切落せ(又は警固せよ)と進言する者<sup>⑧</sup>常識が提出される。

3 大将はあえて不利<sup>⑨</sup>逆説を選んで、名將の器量を示し、諸人を感じさせる。

という仕組みになっている。この二つの説話は、まさに同じ形象の陰画と陽画にほかならない。そのうえ尊氏の話は、義貞の「凡敵の大勢に相向ふときに、御方小勢にて川を後にあて、戦ふ時こそ退まじき謀に、舟をやり、はしをきることそ武略の一の手だてなれ」(梅松論)の言葉を核としてでき上っていることを思うとき、なおいっそう両書の間接な関係がみとめられるのである。

太平記巻三十二では僅かに「將軍ハ三万余騎ノ勢ニテ二月四日、坂本ニ著給フ」とあるだけで、勢田川をどのようにして渡ったかには何の興味も寄せていない。尊氏が沢新藏人に「為勢多耳、橋船竹綱馬踏板以下、急速可致用意之狀如件」と命じた正月十七日付の文書(大日本史料所引南部文書)は、足利軍が急造の浮橋で渡河したことを証しているが、それを背水の陣の故智にならう名將の武略にまで仕上げて語りつごうとしたところに、尊氏理想化の意図はあきらかである。と同時に、それには関心をとどめぬ太平記作者の立場なり

意圖なりを否定的に暗示しているわけであるが、そればかりか、この尊氏の武略を採りあげなかつた太平記は、その子義詮が鹿谷の山を後に賀茂川を前に陣を構へたことを記して、

此陣ノ様前ニ川有テ後ニ大山峙タレハ引場ノ思無ケレトモ、

韓信カ兵書ヲサミノ背水ノ陣ヲ張シニ違テ、殊更士岐佐々木ノ兵共近江ト美濃トヲ後ニ於テ戦ワシニ、引テ暫氣ヲヤサメハヤト思ハヌ事ヤアルヘキト、未サル戦サキニ、敵ニ心ヲソ計ラレケル。

と評して、その布陣の拙劣さを笑っているのである。

源威集の作者はほとんど常に尊氏の身近かにいたらしく、その証左は書中にも「建武ノ初ヨリ武將ニ奉シレ從ニ」、「怒ニ其人數ニテ供奉セシ程ニ」、「關東ヨリ供奉、仕ニル合戦ニ毎ニ外レヌ忠ヲ致セシ間」などと散見するうえに、さらにそれを裏書きしているのは、尊氏の居ない場所での事件をしるす場合に、

○其子細沢使鎌倉ニ馳下ノ間（中略）武將入間川ニ可有御座一定ル。

○然所、下御所義詮ヨリ、飛脚ヲ以被レ申、当手ハ從ニ山崎、良嶺、

延明寺・大原野・老山ニ陳ヲ可レ取、取堅メハ可レ令言上ニ也。

○合戦之事、西坂本ニハ知シ被食サリシニ、桃井ノ手ハ越中國人某等、土岐手ニ二百余騎降參也。子細申間被聞食也。

などのように、聞いたこととして書きとめ、一元的な記述態度をかなり忠実に守っていることである。このように一元的に設定された作者の位置のごときものは、太平記にももちろん見出しえない。足利方の細川清氏や南部六郎らの活躍をとり立てて描くとともに、宮

方の朝倉下野守や赤松氏範らの奮闘をも特筆するのであり、そこにはいずれの陣営にも属さぬ傍観者の気易さと視野の広さがある。ところが、文和四年二月の京合戦の発端を記した部分を両者対照してみると、

### 源 威 集

同十五日涅槃会・東寺ノ敵打出平半条里小路ヲ一手令レ出間、思々ニ懸合、小田佐竹勢ハ樋口京極國府社ノ前、細川相州六条室町、土岐勢者七条坊門、仁木小七郎各々戦功ヲ勵シ、（下略）

### 太 平 記

二月十五日ノ朝ハ、東山ノ勢共上京ヘ打入テ兵糧ヲ取由聞ヘケレハ、蹴散ントテ、桃井兵部大輔、尾張左衛門佐五百余騎ニテ東寺ヲ打出テ、一門二条ノ間ヲ二手ニ成テ打廻ル。

のごとく、源威集は当然東山に陣する足利方がわから描いているが、太平記の方は東寺にたてこもる宮方がわからない叙述である。また東寺合戦の結末を記す部分を対照すると、

### 源 威 集

關東ヨリ馳參・畠山屋張、李部ニ相從軍勢等、各預御感、飯給ヒシカハ下國セシ也。是ヲ文和ノ東寺合戦ト申也。

### 太 平 記

諸大將はヲ聞テサテハ此兵衛佐殿ヲ大將ニテ將軍ト戦ム事向後モ叶マシトテ東山北陸之勢駒ニ策打テ馳歸リ山陰西海之兵ハ船ニ帆ヲ拏テ落行。

とあって、源威集が東国武士の下国をもって擲筆しているのに対して、太平記は宮方勢の帰國を語っている。こういっただ所にも具現しているように、卷三十二を全般的に見れば、概して南軍のがわから

の記述が多い。

太平記が卷十二（公卿一統政道事）と卷二十一（後醍醐帝の崩御）とを境として三つの部分にわかれるとする見かたは、すでに常識となっている。そして難太平記の著者が太平記作者を「宮方深重の者」とした規定を、その初めの部分だけに認め、後半部にすすむにつれて宮方を否定して武家方に身をよせ、とりわけ第三部などは、足利方の意をうけた単なる合戦功名記の如き体裁であるとまで言われたりする。作者主体の立場がかく巻を逐つて移動していることは、四十巻を通読する者の一様に抱く印象ではあろうけれども、太平記の表面にあらわれたこのような変化と、歴史的事実としての時代相の変動や、それにもなう作者主体の現実認識の推移や、さらに現実と作者とを媒介したはずの都市人の意識の変化などとの関わりをいっさい捨象して、いちがいに狭く武家方の作者による書継ぎというふうには結論することには疑念が残る。建武四年（一三三七）の金ヶ崎落城までのことを記す梅松論は貞和五年（一三四九）に足利臣下（なかならず細川氏に關係の深い）者によって書かれたと考えられているが、われわれはこの足利方の手に成る書との比較を通して、太平記の第一・二部における作者の立場をかなり明らかにすることができるとして一般に、太平記の前半が後醍醐天皇・大塔宮・新田義貞らに対する批判をも含んでいるにかかわらず、作者の立場を「宮方深重」とする見かたを捨て去らないのには、足利的なる梅松論との間にはやはり著しい相異があるという事実を看過しえないこともあらずかっているのである。ところが第三部になると、もはや梅松論は比較の材料となりえず、太平記作者の立場を武家方とみなすのを妨げなくなる。梅松論の成った貞和五年といえ

ば、楠木正行の戦死した翌年に当り、その頃を境にして南朝の威勢はいっせう衰退し、同時に足利政権そのものも一種の自壊作用をはじめ、内乱の様相が大きく変るのである。時代の激動を執拗に追究していこうとする作者にとっては、「二十余年保南山之谷ノ底ニ、埋木ノ花開春ヲ知ヌ様ニテヲハスル」南朝政権などに焦点を合せているわけにはいかない。いきおい武家方に関する記述が圧倒的に多くなるのであるが、しばしば武家方足利方といわれる第三部に属する卷三十二を、足利的立場からの一元的記述を徹底させている源威集とくらべてみると、彼れにある尊氏讃仰は此れにはないし、此れに見える足利批判は彼れには見えないというふうには、やはり大きな色合いの相異が見られるのであって、作者の立場は決して足利方武家方ではあり得ないと思われる。もちろんこの事は、作者宮方という旧来の説を単純に肯定することにもならないが、足利幕府の要職にもあった難太平記著者の眼には、第三部をも含めて「宮方深重」と映つたであらうことは、容易に推測できる。

卷三十二を全般的にみれば概して宮方勢のがわからの記述が多いということも、作者の政治的立場よりは、宮方勢が京の内において、足利勢がこれを外から攻めたという、両軍陣營の位置關係により多く関わっていると考えられる。両軍は再三た代って入京するが、作者のスポットは、京都という舞台の中央にいれ代り進み出る両軍を客観的に平等に照らしているといった感じさえする。文和四年正月十六日、直冬を大将として斯波・桃井らの宮方が上落してきたとき、直冬の「黒皮ノ腹巻ニ夷弓持テ草鞋ニ差革皮ヲ」着た姿を見て、「天下ノ武將ニハ難ニ成出立哉ナト憚カル所無」く言い放つた「見物ノ童部」と同様、京の内において時勢を傍観している者の

視点を感ぜさせるのである。

四

源威集の作者は、彼自身も参加した京の合戦について、次のような印象をもらしている。

落中之事ナレハ、見物衆五条橋ヲ棧敷トス。勝軍成シカモ、手負打死多カリシ程ニ、諸人愁傷之処、不思議成シ事ハ、当日終夜清水坂ニ立君袖ヲ烈テ、座頭琵琶ヲ調參シニ、少々平家語ランスル鳥呼ノ者モ有シ也。猶喚シカリシ事ハ、御遺物買物候シ敷。古針買伊徘徊シ、合戦成ラヌ日ハ、御方敵落中之湯屋ニ折合、時々物語過ノ合シ更ニ無煩シ也。

このような京の庶民世界の風俗を記して、さらに「辺土田舎ノ軍ニハ、其所ニ人跡ヲ不<sub>(レ)</sub>留。是ソ都ノ故ト覺シ」と驚嘆している。これは京に住みなれたり又京の合戦にしばしば従軍したものの眼ではない、明らかに「辺土田舎ノ軍」に馴れた東国武士が都の風俗に見開いた新鮮な驚きの眼である。合戦のさなかに五条橋を棧敷として賑がっている見物衆、それは源威集作者にとってはいかにも珍奇な風俗なのであったが、太平記作者の都会人的な眼にはむしろ当然の風景なのである。太平記に収められた二十六首（流布本による）の落首を初めとして、いかにも京童的な批評が随所に見られるほかに、京童の眼を通して事件を眺めている作者をも見いだすことができる。たとえば当時扇うちわのばさら絵に書いてもはやさぬ人もなかつたという阿保・秋山の一騎打の話（巻二十九）がある。二人が名乗りをあげて閑かに馬を歩ませる、その一瞬の静寂を描いて、作

者は、

兩陣之兵ハ、アレ見ヨトテ軍ヲ止テ手ヲ舉ル。敵方之見物衆ハ、戰場共云ハス歩リ寄り、堅睡ヲ吞テ是ヲ見ルニ、寔ニ軍ノ花ハ、只是ニ不如トソ見ヘタリケル。

と言っているが、彼は見物衆の眼を通して二人の動きを見つめていたのである。太平記の作者をこうした群衆の中に求める説には賛成しかねるが、秋山九郎をして「華カナル打物シテ見物衆之居限リ醒セン」と呼ばわらせた作者には、享受者としての都市人が大きく働きかけていることを見逃すわけにはいかない。それは制作の意図なり立場なりからして、都市人を享受者としては全然予想しなかつた源威集作者の、ついに持つことのできなかつた視点なのであった。

源威集の作者は、ほとんど常に將軍家に焦点を合せて、これを仰ぎ見る姿勢で筆を運び、好んで帷幄の内を描いている。文和四年二月六日の合戦で、南軍山名勢は神南に陣する足利軍を攻め、ついに義詮の本陣にまで迫まるが、その時の有様は、源威集・太平記・赤松記の三書が描いている。

源威集

太平記

赤松記

河内山統ニ三十余町ニ陳取シ味方ノ陳被ニ打破テ、武將御坐近責入、自元敷皮ニ御坐、御旗被立、御前ニハ道管則祐候ス。責付時分御馬可被<sub>(レ)</sub>食由申仁アリ

羽林相公ノ陣ノ辺ニハ、纒ニ勢百騎計ツ貼リケル。是假モ尙佐渡判官入道々管、赤松律師則祐此陣ニ踏笛テ、何クヘカ引候ヘキ。只我等カ御前ニテ打死仕候ハン

御前ニハ奉行頭人、外様ニ赤松律師則祐佐々木判官入道管計伺候ス。敵急ニ見ヘシカハ、義詮叶ハシトヤ思召ケン、御馬ニ召レ、落方ヲ求給フナリ。則祐走寄

ケレハ、武將仰云、一足モ御座レ可レシ、御馬不レ可レ有御用一急々御馬可レ退由仰ケル時、(下略)

ヲ御覽シテ、其後御自害候ヘト、大將ヲ奉レ請テ、帷幕ノ内ニ立居タリ。

テ、七寸ヲ控ヘ申様ハ、則討死仕テ後ニソ、左様ノ御態ハ召ルヘシ。正ナクモ見ヘ給フモノカナト申セハ(下略)

## 五

はいないことを窺うことができる。

太平記には、たしかに中下層の武士、とくに畿内周辺の土豪層の活躍が大きな位置を占めている。卷三十二にも白魚三郎左衛門尉

(備前) 後藤基明(播磨)、二宮兵庫助(越中)、南部六郎(若狭)等々の活躍が特筆されている。源成集は主として結城・小山・佐竹・那須ら関東諸大名の軍忠を記録しているが、それらの中で比較的詳細に描かれているのは那須備前守資藤くらいのものである。文和四年三月二十二日、最後の合戦の日、味方の敗色が濃くなった

ので、尊氏は七条河原に待機させておいた資藤に出勤を命じる。資藤は一族郎従二百余騎を引きつけて七条大路を西へ攻めつけ夜半まで散々に戦うが、遂に負傷し、「息之下少通」る状態で、戸板に載せられて尊氏の前に戻る。「置ニ敵箇所ノ疵被シ御覽ニテ、今度ノ振舞神妙之由有御感」ケレハ、忝モ御詞耳ニ入カト覺テ、目ヲハタト見開キ、血ノ付タル軀ニテ打諾キ々々命ヲ墮した。作者は帷幕の中心にいて、その光景をつぶさに見たのであろう。が、作者は、尊氏が「御泪ヲ浮」べて、資藤の父資忠の忠功などをまで語ったのを「忝ナシ」と恐れし、將軍尊氏の部下を思う仁慈の深さと那須氏の軍功と資藤の誠忠とを描くことに、より大きな意義を見出している。仁慈といふ誠忠といつても、そこに投影された作者の伝統的身分観念はかえって主従の人間味を損なうて、暗鬱であり悲壯である。太平記には富方の山名師義が自分を救うために身を犠牲にした河村弾正忠を悼んで悲嘆にくれるさまが描かれていて、そこには武士社会の

三者を比較すると、帷幕のうちに義詮・道管・則祐の三人が居並んでいるという人物構成はまったく共通しているが、源成集は義詮もまた尊氏と同じように危機に臨んでも寂然不動の、つまり源氏の棟梁としてあるべき武人像に描き上げ、太平記は將軍家にはいささかの関心も示さずに道管や則祐らのより行動的な武士にしか焦点を合わせようとしな。さらに赤松記になると、おそらく太平記をもとにこれを改作したのであろうが、義詮は怯懦な武將になりさがり、かわって義詮を叱咤し激励する則祐に焦点が向けられる。しかも太平記は、源成集や赤松記がごく簡略に説明的にしか触れなかつた則祐麾下の武士たちの奮迅をこそ、意欲的に描いているのである。源成集の作者が好んで描いた帷幕内のことは、太平記作者の関心事ではない。彼は思う存分の活躍を武士に要求して、ひろびろとした大空の下へひっぱり出したがっている。そこはまた見物衆のむらがる所でもあった。源成集や赤松記が、將軍家または赤松の家を語ろうとしたその意図の故に、抹殺せざるを得なかつた階層、すなわち合戦の場におけるより下層の武士たちの活躍ぶりを、太平記は積極的にとり上げて意欲的に記しているのであるが、そこにも現実と作者とを媒介しつつ且つまた享受者でもあった都市人の意向の反映を見ることができようし、作者自身もまた特定の組織の内部に位置して

中で體驗に培われ自然發生的に芽生え葉き上げられてきた極めて人間のな主従の結合が見られるのであるが、源威集が尊氏の理想像と東国武士の忠功を描こうとして、その意図をじゅうぶん文学的に形象することができず、作者の観念の性格を露呈しているのにくらべると、太平記の方は、作者の批判意識の背骨をなしている伝統的儒教的道徳観念にもわずらわされないで、行動的な武士をいきいきと躍動せしめることのできた多くの場面をもっている。

那須資藤の死は太平記でも特記される。ここでは尊氏に出動を命ぜられた資藤が「一儀ニ不<sub>レ</sub>違、御方大勢引退テ敵皆勇ミ進メル陣ノ真中へ懸入テ、兄弟三人一族郎従卅六騎、一足モ不<sub>レ</sub>引打死シケルコソ哀ナレ」とあるだけで、七条大路での奮戦ぶりも帷幕の内の臨終の様も語られていない。作者の関心は全く別の所にあつた。

太平記によれば、資藤は合戦の前に故郷下野の老母に消息を送つて先立つ不孝を詫びるが、母からは励ましの言葉とともに「是ハ元暦ノ古へ、古那須与一資高壇浦合戦ニ扇ヲ射テ名ヲ後代ニ揚タリシ時ノ愧也」と言つて薄紅の母衣を錦の袋に入れて送つてきたことになつてゐる。資藤のその日の出立ちを、源威集は「羣祖資忠、昔與責之時、從<sub>レ</sub>頼義將軍<sub>ニ</sub>給タリシ」鎧を著、「右ノ脇ヨリ古ビタル<sub>ニ</sub>綱ヲ取掛」けて打立つたと伝えてゐる。鎧の由来を説いて母衣に触れないのは、それが那須与一伝來などという由緒ある代物ではなかつたからである。那須系図や寛政重修諸家譜には太平記の記事に拠つたか老母が母衣を送つたことは注しながらも、那須与一をもち出すことだけはさすがに遠慮してゐる。資藤を激励する老母の、孝経の有名な一節そのままの消息と同様、真实性に乏しい。他ならぬ「那須」の資藤の「古ビタル綱」からの連想が、那須与一の、しかも扇の的

射たときの母衣へと發展することはきわめて自然であり、ことに合戦のあいまに平家を語らせ平家を聞いていた当時の武士や都市人にとっては、なおさら当然な結びつきだつたに違いない。そこには太平記を受け入れた当時の都市人の嗜好が強く反映しているといえよう。この卷三十二には他にも平家物語と繋がりのある説話がある。齋藤実盛の説話によつて潤色された二宮兵庫助の話、河原太郎次郎兄弟の活躍を背景にもつ河原兵庫亮重行の話などである。これらのは話には三つの共通点がある。

1. これらの人物の奮戦のありさまそのものは詳述されていない  
2. 説話の核となつてゐる事件(例えば資藤と老母との消息)は、

京の見物衆の眼の届かぬ世界で起きたものである。

3. 都市人たちにとっては身近かに経験したこれらの武士たちの最期と、琵琶法師などを媒介にして熟知している源平時代の叙争詩的な世界とを、極めて現実に結びつけてくれる説話である。

右の三点である。太平記の作者は、混沌として取捨のつかぬ時勢の動きを執拗に客観的に描きつつけながら、混沌の現実の中に聊かの契機を求めては、叙争詩的な世界の裁ち入れを試みてゐるのである。それはこの作品の各巻に夥しい平家物語の投影の数々とともに、軍記物の典型としての平家物語が、いかに強く太平記作者の方法を規制していたかを示すものであろうが、同時にまた平家物語的な世界との結びつけに喝采を博し、それを求める都市人の、自由で明るく健康な空想を反映したのもいえよう。

上來、太平記卷三十二と源感集とを、それぞれの作者の視点の据え場所を中心に比較考察して、種々なる相異点を見出したのであるが、それら諸々の相異の由つて來たる所以は、結局次の二点に要約できると思う。すなわち第一に、作者が特定の組織の中にその位置を占めていて、その位置に密着した制作意図と、一元的な視野とを有しているか、それとも傍觀者の立場にあつて、しかも複数の視点に媒介された広角的な視野をもっているかということ。第二に、予想される享受者の階層を武士階級（殊に関東諸國の）だけに狭く限定しているか、それともより広汎な階層（殊に京畿周辺の）を相手として彼等の意識をもじゅうぶんに反映させているかということである。

— 広島大学大学院学生 —

- 註① 太平記（卷三十三、飢人投身事）。西源院本（刀江書院刊）による。以下特にことわるほかは同じ。
- ② 野尻本（内閣文庫藏）は凡四十二卷だが、卷四十二は「八幡愚童訓」から採つて附加されたもので太平記元来のものではない（亀田純一郎氏「太平記」）。題簽及び卷一の初めにある「太平記目録」によつても本来は天正本系統であることが明白だが、卷七・二十一と卷三十一以下の都合十三卷は他系統によつて補われたもので、従つて卷三十二の綱目の立て方も「目録」と本文とは齟齬している。
- ③ 源感集については後藤丹治博士が「日本文学書目解説四室町

時代」で簡略な解説（ほぼ同趣の記述が吉沢義則博士「室町文学史」にもある）をされている他は、史籍解題や辞典の類にも所見がない。

- ④ 尊氏が後醍醐帝の菩提を弔うために建立した天龍寺供養の盛儀は、太平記（卷二十四）にも詳しいが、社会の混乱を「先帝之神靈御憤り」によると考へての供養だと語り、武家の奢侈と政治の貧困に起因することを反省せぬ愚昧を責め、「真俗共ニ憐憫之心」があると批判している。

- ⑤ 明日（文和三年十一月十六日）河原御政行幸。（中略）御子左大納言為定宿所、于時武將ノ御棹敷。有職者ニ被レ尋、行幸時可レ為無礼乎否。申云、御藤ヲ揚ラルヘシ。更ニ不可レ有子細ト云云。重而仰ノ間、縦簾ヲ卷共、從レ御輿ノ高カ監事可レ有其恐一モ、当日ノ朝俄ニ板敷從レ際、柱ヲ可引切レ由敵密ニ被レ仰舍一聞其沙汰致シケレハ、御棹布ハ不見。是ヲ將軍正シキ禮儀ト世ニハ申セシ也。（源感集）

- ⑥ 折シモ雪降北風冽シキニ、武將湖ヲ御覽シテ、詠シ顔ニテ笑ヲ含給テ、佐竹刑部大輔（師義）御目見合セ賜テ、雪ヲ花ト語ム眼前也ケリト、漕行舟ノ跡見エル迄、又花ノ風吹ノ志賀ノ山越ノ歌コソ、今眼前ナレハト被レ仰シ、師義數寄者ト被レ思召ケル故敷ト、時ノ面目ニテソ有シ。（同上）

- ⑦ 太平記ではその代りに義貞主従の超人的な剛力ふりが誇張され律動的に語られる。ここにも梅松論・源感集と太平記との性格の相異、とりわけ享受層の違いが顕著である。

- ⑧ 本文は永和書写本（高乗照氏藏）による。この評語は天正本系統および流布本系統の諸本にあり、ほとんどの旧形本には

見られないものなので、後人の加筆かとも疑われるが、旧形本の中でも特に古いとされる永和書写本及び袖田本（但し刊行会本）にも見られることは注意される。

⑥ 本文は説輝本（上野図書館蔵）による。この京童的批評は天

⑩ 正本系統にだけ見られる。

参考太平記所引による。「参考太平記引用書目」によれば播磨書写山十地坊所蔵の由で、群書類従本赤松記とは別物らしい。